



小児科で研修 → 研修中にMRIを勉強 → 大学病院の放射線科医 → オランダの大学で研究 → 工学部教授

高原太郎氏

東海大学工学部医用生体工学科教授

1961年東京都生まれ。88年秋田大学医学部を卒業。慶応義塾大学医学部小児科で研修後、90年獨協医科大学放射線科で研修、92年聖マリアンナ医科大学放射線科に。95年には米国Emory大学 (Atlanta) 短期留学。99年杏林大学医学部放射線医学教室助手、2003年東海大学医学部基盤診療学系画像診断学講師、07年オランダ・ユトレヒト大学病院放射線科客員准教授、10年から現職。

大学を移りながら最先端のMRI診断学を研究。工学部教授に

現在、東海大学工学部医用生体工学科の教授として、“医の心”を持つ臨床工学科技士の育成に携わっています。

もともとはロボットやコンピューターを学びたかったのですが成績が悪く、2浪することに。当時、初めて付き合った女性に振られ、食欲不振、不眠になり、近所の内科に連れて行かれました。医師が1時間ほどじっくり話を聞いてくれ、楽になりました。待合室に出たら、ものすごい数の人が待っていて。そんな中で話を聞いてくれた医師、待ってくれた患者さんたちに感謝した記憶があります。以後、猛勉強して工学部とともに受けた医学部にも合格し、進学しました。

研修先の慶応義塾大学医学部附属病院小児科では、自分はどうも急性期の患者さんの検査にはアドレナリンが出るけれど、順調に回復しつつある患者さんには関心が低くなると気づき、10年経つと手を抜くに違いないと悶々としていました。

ある日、大学生協で“Clinical Magnetic Resonance Imaging”という本の「タテ切りの脳の写真」を見て稲妻が走りました。その後、派遣先の病院の小児放射線科研究会で、自分たち小児科

医が見つけられなかった赤ちゃんの気胸を当時の獨協医科大学の藤岡陸久助教授がシャウカステンにX線画像を掛けて数秒で発見されたのに驚いたこともあって、放射線科医になろうと決めました。

そして、移った獨協医科大学病院に初めてMRIが来た日から担当させてもらいました。放射線技師とともに撮影まで勉強し、研修中にもかかわらず、結局9カ月間担当した後、関連病院で1.5テスラのMRI導入時に常勤医となりました。20代で他の画像検査を知らないうちにMRIに触れた医師はそうはいないでしょう。私にとってMRIは母国語のようなものです。

一方で、MRI以外の知識がないことも痛感し、聖マリアンナ医科大学で学びながら診療を続け、放射線科医として一人前になりました。99年に『MRI自由自在』（メジカルビュー刊）を出版しました。当時は「助手」の執筆は前代未聞でした。許可いただいた教授に感謝しています。

全身を撮影できるMRI撮影法などを次々と開発

99年に杏林大学、2003年に東海大学に移りました。04年に、従来は局所的な撮

影だけを行っていた拡散強調画像を全身撮影に用いる方法（DWIBS法）を開発し、初めて論文が日本医学放射線学会の英文誌“Radiation Medicine”に掲載されました。この論文がきっかけで07年にユトレヒト大学病院放射線科客員准教授として赴任。私の論文を読んで、拡散強調画像の研究がしたいと来てくれたポスドク研究員らの助けもあって、全身の末梢神経描出に世界で初めて成功し、“New England Journal of Medicine”に論文が掲載されました。

新しいモノ好きで“天然”なところがあり、これまで人間関係に悩むことも多かったのですが、大変なことがあると必ず助けてくれる人との出会いがありました。大変なことのあとにはその3倍くらい、いいことがある（笑）。人間万事塞翁が馬だと実感します。

昨年、年齢的にもベストなタイミングだと思い、工学部の教授職を得て帰国しました。両親が教員だったので、教えるのは楽しい。一方で腸管のMRI検査法などの研究を続けています。

今も時々診療に携わることがありますが、いずれはもっと患者さんと向かい合う立場に戻りたい。大学の試験休みには気仙沼市で開業している同級生を手伝って、患者さんの話を聞くボランティアをするつもりです。慣れたら学生も連れてきたいです。

生まれ変わっても、やっぱりドクター？

「悔いのない、いい人生ですが、チャレンジャーなので、同じことは避けて、次はロボットを作ります」

文／小島あゆみ